HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	後方羊蹄山（マクカリヌプリ）の植物分布状態に就きて
Author(s)	西田, 彰三
Citation	札幌博物学会会報, 4(1), 31-42
Issue Date	1912-09-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60849
Type	journal article
File Information	Vol.4No.1_006.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

後方羊蹄山(マクカリヌプリ)の植物分布狀態に就きて

西田彰三

On the Distribution of Plants on Mt. Makkarinupuri.

By

Shōzo Nishida.

緒言

後方羊蹄山は本道史上の名山なり、而も所產植物の豐富なると交通の便に據ること全道諸高山に冠たり。從て有志の本山に植物採集を試むるもの頗る多し。余は明治三十九年八月故恩師莊司萬六氏に從つて初て本山に登り、其植物分布狀態の特異なるに注意し、爾來これが調査をなさむことを企て、明治四十一年宮部博士に從つて再び登山し、以て第二回の調査を遂げ、略其要を得たり。

明治四十四年八月大野博士に從つて三たび本山を探り、やゝ其植物分布狀態を詳にするを得たり。即ち錄して同好の參考に供せんとす。然ども、本山山域の廣大にして分布區域の多樣なる、調査の完璧は本日に得て望むべからず。須く後日の探險調査を待ちて修補するところあるべし。

本篇題して後方羊蹄山植物分布狀態となす。由來本山名の和稱に關しては區々の論議あり。曰く、羊蹄山、眞狩岳、後方羊蹄山、蝦夷富士と其何れを是とし、何れを非とすべきかは玆に評論するの餘白を有せず。余は只而かく信ずるが故に斯く題せるのみ、これが理由と論評とは後日の發表を待つべし。

本山の高度亦區々たり。從て垂直分布に於ける高度の標準を定む

ること頗る難事なり。依て本編は北海道廳最近の調査にかゝる1943米突(6470尺)を取り、中間高度は前後三回に渡る空盒晴雨計による測定を基礎として推算せり。

余は本編を草するに當り懇教を辱ふせる、宮部博士、大野博士、半澤學士、伊藤學士、並に學友近藤金吾君に謹謝し、又諸般の便宜と助言とを與へられたる蝦夷富士登山會幹事高山萬次郎氏並に小樽區星野三郎氏に謝意を表す。

茲に悲むべきは恩師莊司萬六大人の今や幽明境を異にし、本篇成るの喜を共にし、感謝の意を表する機會をして、永遠に有せしめざることを、只々謹て靈前に呈す。

地　理

後方羊蹄山、一名蝦夷富士は土人の所謂マクカリヌプリ(海抜1943米突)にして、北緯42度50分東經140度48分膽振國虻田郡に在り、本道西南部に於ける最高峯なり。山容端正なる缺頂圓錐形にして、裾を四方に引き、北は傾斜38度にして倶知安高原に連り、東は32度にして目名原野に接し、南は30度にしてマクカリベツ原野となり、西は傾斜やゝ緩にして28度、比羅夫臺地に向ふ。山麓は東北西の三方シリベツ河環圍し、南西マクカリベツ河流れ、二水合して西流し山峽を破りて、後志灣に入る。故に山域自然に兩流によりて限界せらる。

比羅夫口(西口)山麓に一小湖あり形半月狀をなす、これを半月湖となす。湖の周壁傾斜35度周圍一里餘倒圓錐形狀をなす、これ即ち太古に於て爆裂せる寄生火山口なり。絶頂に三個の舊噴火口あり。

大噴火口は周圍約1里18町、直徑約1000間、深さ100間、東南の二面は峨々たる安山岩質熔岩よりなり、其傾斜30—38度、下るを得べくして上るに容易ならず。北は30度西は更に緩にして26度、北及西の內壁に岩石の露出少なく粉碎岩よりなるを以て、昇降容易なり。

口底は圓形にして直經約70間、八月初旬迄は潴水あるも中旬蒸發し去りて大磐磊々たるの上僅に御手洗的潴水を見るのみ。更に口壁の頂上を一周せんか。西壁頂上一の小賽の河原あり、これを中靈臺となす。蝦夷富士山頂、噴火口內部の壯觀を一眸に集め、中、小の火口も亦指呼の間にあり。中靈臺より右廻り西南に向つて進まんか、馬背を上りて南門臺あり。東南壁上は寄峰亂出し石尊岳、天狗岳、鎗が岳、或は劍峯をなす、此間或は岩を跳ね、或は怪岩の間を通じて、遂に東北方陸地測量部三角標に達す。これを越て蝦夷富士頂上最高峯北鎭岳1943米突に達す。更に北に下らんか望旭臺となり、遂に中噴火口上の北門臺に達すべし。

中噴火口は、其口壁周圍凡4町30間、底面圓形にして其周圍約10間、中央に安山岩質熔岩の大塊磊々たり、岩脚潴水を見る。

小噴火口は、口壁周圍約3町30間にして、甚だ淺し。下底に潴水あり、多くおぞほろね、を產す、これをねぐさが池となす。

本山は其外壁に於て數多の穴澤を有し、其走向によりて各特異の植物區景をなす。海拔約1800米突にして一大緩傾斜地あり、初夏の候百花爛熳黃紅白紫を競ふ、これを御花畑となす。中に小湖あり、不斷の水を潴ふ、雲泉湖と云ふ。湖畔の巨岩磊々たる間綴るに珍花をもつてし、自ら小公園をなす。西門臺下一小溪あり、御花畑入口より右折し約9町にして達すべし、溪間の小流潴して長池をなす、池中にほしみどろを產す、星が池と稱せらるゝも奇なり、池畔亦獨特なる植物景觀を見る。南門臺下、下ること約300尺にして又澤あり、分れて三小澤をなす。八月中旬尙殘雪を見多くみつばわうれんを產す、これを藥草が原と名づく。三角標より第二番溪を下ること約1000尺にして一大緩傾斜地あり、本山中第一の御花畑たりこれを靈岩公園と云ふ。

植物數及び植物帶

後方羊蹄山は交通の便に據ること全道諸高山中第一に位す。從て本山に植物採集を試むるもの最も多く、茲に擧るの餘祐を有せず。只本山所產の植物にして既に記錄せられたるもの

明治二十八年マツカリヌプリ氣象觀測記	24科	47種	水科七三郎氏 戸津　高知氏
明治三十八年植物學雜誌第十九卷第二百二十七號マクカリヌプリ植物	44科	96種	粟野宗太郎氏
同年本會會報第一卷第一號、マクカリヌプリ山頂植物	35科	77種	半　澤　洵氏
明治四十五年宮部博士就職二十五年記念論文集　同目錄の補遺		24種	同　　氏
明治四十二年高山植物採集及培養法、中にマクカリヌプリ山植物目錄	28科	64種	志村　鳥嶺氏
明治四十四年文武會雜誌第六十四號蝦夷富士の花	42科	109種	近藤　金吾氏
明治四十五年宮部博士就職二十五年記念論文集蝦夷富士山頂に於ける山火後發生せる植物に就て	7科	14種	同　　氏

本篇に記載せる後方羊蹄山所產の植物數は顯花植物66科230種隱花植物6類35種總計265種を計せり。

植物帶　マクカリヌプリ山麓シリベツ河マクカリベツ河界限は、マイル氏の所謂第三帶(落葉濶葉樹帶、山毛欅帶)に屬し、1200尺の駒返附近に及び。1200尺以上は、第四帶(針葉樹帶、椴松帶)に屬すべきものにして、中腹以上4000尺に達し。其主木はゑぞまつ、とどまつにして、なゝかまど、うだいかんば、むしかり、等の濶葉樹種を混ぜり。4400尺以上頂上迄は第五帶(偃松帶)にして、4400尺の峰背及び5000尺迄の溪谷は上方濶葉樹林(灌木帶主木ゑぞのたけかんば)を現はし、以上は純然偃松帶にして頂上に及べり。純然たる草本帶は、本山に於て、これを見る能はすと雖も、6000尺以上6470尺の山頂に達する間に於て偃松帶に交雜するものを見るを得べし。

植物配布の狀態

本山の植物配布狀態を見るには、現今唯一の登山口たる比羅夫口(半月湖畔)よりするを可とす。往時登山道の開鑿今日の如くならざりし際は、登山者の多くは目名口(目名原野)カシユブナイ川上流たる一條の穴澤を利用せり。されど其傾斜實に30度、比羅夫口25度乃

至28度に比し、やゝ急峻をきはむ。而して函樽鐵道の開通と、蝦夷富士登山會の登山道開鑿とは、此比較的緩なる斜面利用をして復活せしめ、遂に今日の盛況を見るに至れるものなり。以下比羅夫口より觀察したる本山植物の垂直分布を述ん。

半月湖畔(800尺)より駒返し(1200尺)に至る沿道。

あおだも、いたや、うだいかんば、おほなら、おほばぼだいじゆ、くは、おへうだも、おにぐるみ、こぶし、さはしば、しなのき、しうり、きはだ、しらかんば、せんのき、とちのき、なゝかまど、ほゝのき、みづき、むしかり、めいげつかへで、やまはんのき、等の濶葉喬木の鬱蒼たる間とどまつの混生するあり。樹下に見る灌木の重なるもの、こまかだけすぐり、おがらばな、いぬがや、いぬつげ、おほばすのき、のりのき、等にして、樹間を縫ふてやまぶだう、こくわ、等の攀緣するあり。樹幹に纏繞するもるもの。

つたうるし、つるあぢさゐあり。樹下に見る草本の重なるもの。

あかそ、うど、ゐぞにう、ゐぞのきつねあざみ、ゑんれいさう、おほばいらくさ、えぞのよつばむぐら、おほばうばゆり、おほばいたどり、かうぞりな、きつりふね、くるまゆり、くさそてつ、くるまばつくばねさう、くされだま、くるまばさう、こんろんさう、さゝばらん、さらしなしょうま、さはあぢさゐ、とちばにんじん、なつゆきさう、ながじらみ、はんごんさう、はなうど、ひよどりばな、ひとりしづか、さんかえふ、めうま、まひづるさう、みやまとうばな、むかごいらくさ、みやまたにたで、やぶたばこ、ゆきざさ、よぶすまさう、れんぷくさう、やなぎらん、つるりんどう、つくばねさう、おほうめがささう、うまのみづは、よもぎ等黄紅白紫樹下岩際を飾るを見るべく、ねまがりだけ、路傍を埋むるの間を縫ふて進む。

駒返し(1200尺)、急坂これより起る、崎嶇たる岩際を縫ふて、羊腸十

八曲折、蘚苔滑なる處既に針葉喬木林裡に入る。

とどまつ、えぞまつを主とし、濶葉樹の其間に混生するもの、いたや、うだいかんば、おがらばな、おほばやなぎ、しうりざくら、なゝかまど、みねかへで、むしかり、ひろはにはとこ等の喬木、小喬木を見るべく蔓木及灌木の岩際に立つもの、のりのき、あかみのいぬつげ、こまがだけすぐり、むらさきやしほつつじ等にして、いはがらみ、つるあぢさゐの樹間岩角に攀縁するを見るべし。草本の重なるもの。

うど、おほばたけしまらん、おほばいらくさ、ゐぞにう、ぎようじやにんにく、さはあぢさゐ、さらしなしようま、しらねあふひ、たけしまらん、てんなんせう、とちばにんじん、なつゆきさう、まひづるさう、むかごいらくさ、よぶすまさう、るゐゐふぼたん、るゐゐふしようま、やまぶきしようま、あまちやづる、にして、岩際の陰地に生ずるもの、みやまたにたで、みやまかたばみ、れんぷくさう、づだやくしゆ等紅白の小花を綴るの外、多く羊歯類を産す。

じうもんじしだ、とらのをしだ、くじやくしだ、いわがねさう

四合目羽仙閘(2300尺)、に達すれば樹種も其数を減じ包圍のえぞまつ、天に柱するの間いたや、うだいかんば、えぞのだけかんば、れがらばな、なゝかまど、等の濶葉喬木小喬木其間に點綴し、ねまがりだけの下交ふるに、あかみのいぬつげ、おほばすのき、つるつげ、みやましきみ等を以てし草本の種類甚だ多からず。

あきのきりんさう、おほばこ、みやまたにたで、ひとりしづか、やなぎらん、

みかへり松(4000尺)に達す。但し蝦夷松の巨木にして畸態他に述むべからず。此邊喬木帯の終點と思はる。針葉喬木漸次其高さと太さとを減しえぞのだけかんば代りて勢力を得延々大蛇の伏せるが如きを見る、即ち上方調葉林(雁皮帯)とす。急坂直上天を臨んで登るの

間、あくしば、いちね、(おんこ)うこんうつぎ、ねぞのたけかんば、おがらばな、おほばすのき、こしあぶら、あかみのいぬつげ、ちしまざくら、つるまさき、ななかまど、つのはしばみ、みねかへで、むらさきつりばな、むしかり等の小喬木灌木を見るべく樹下に綴る草本には。ねぞすずらん、あきのきりんさう、いはつつじ、うすばさいしん、ねぞふすま、えぞのよつばむぐら、たにぎきやう、はうちやくさう、まひづるさう、みやまえんれいさう等を主とし時にしやくじやうさうを見ることあるべし。

偃松帶(1400尺)、えぞのたけかんばの老幹延々峻坂に横はり、蛸雁皮、腰掛雁皮、或は鳥居雁皮の畸態百出するの邊、既に偃松帶に移る。これより七合目、胸突參丁(5000尺)に至る間、樹本の重なるもの、あくしば、うこんうつぎ、おがらばな、おほばすのき、ねぞのだけかんば、ちしまざくら、はひまつ、みねかへで、みやまななかまど、みねやなぎ、むしかり等にして、樹下の草本には、

あきのきりんさう、いはつつじ、うすばさいしん、ねぞのよつばむぐら、おほばたけしまらん、からまつさう、こすぎらん、こけもも、ごえふいちご、とうげしば、なつゆきさう、みやまたにたで、みやまかたばみ、

電光坂(5300尺)、再び羊腸曲折五十三回の峻坂、所謂電光坂に出づれは、溪谷分布の景觀を見るを得べく。

うこんうつぎ、ねぞのだけかんば、ちしまざくら、はひまつ、ほざきななかまど、みねかへで等の樹下、あきのきりんさう、いはべんけいさう、おほかさもち、あわもりしようま、きばなしやくなげ、ぎようじやにんにく、こけもも、いはつつじ、ごえふいちご、ちしまふうろ、まるばのひれあざみ、よぶすまさう、からまつさう、

等美なる高山植物黄紅白紫を競ふを見る。急坂盡くるところ、

御花畑入口(5800尺)、に達す。はひまつ密生する間みやまななかま

ど、うこんうつぎ、きばなしやくなげ、はなひりのき、ちしまざくら、おほばすのき、等を混生すべく、草本の重なるもの、

あきのきりんさう、あわもりしようま、いぶきぜり、えぞにう、おほかさもち、からまつさう、ぎようじやにんにく、さんかえふ、まるばのひれあざみ、まひづるさう、ちしまふうろ、やまはは こ、

御花畑(6000尺)所謂神苑に達すれば、雲泉湖畔百花爛漫の荘観に接すべく。

あきのきりんさう、あらしぐさ、いはべんけいさう、いはおとぎり、いぶきぜり、うらじろたて、うこんうつぎ、えぞのつがざくら、おほやまふすま、からまつさう、きばなしやくなげ、ごぜんたちばな、ごぜふいちご、さまによもぎ、しらねあふひ、つまとりさう、なつゆきさう、ひめいちげ、ひろはのひめいちげ、ちしまふうろ、まるばのしもつけ、みやきんばい、みやまななかまど、みやまがりやす、うめばちさう、まるばのひれあざみ、こけもも、

等黄紅白紫藁綠を點綴して岩角を飾る。更に山頂宿泊所雲表閣背後の斜面を探らんか、

あらしぐさ、いはおとぎり、いはべんけいさう、いぶきぬかぼ、うめばちさう、うこんうつぎ、うらじろたて、おやまりんだう、くるまゆり、さまによもぎ、ちしまふうろ、しらねあふひ、はくさんちどり、まるばのひれあざみ、やまはは こ、あわもりしようま、おだまき、みやまひかげのかづら等を見るべし。雲泉湖より、頂上噴火口に達する急坂、左に偃松の焼跡を登ること2丁の間岩際に、

えぞのよつばむぐら、たにぎきやう、ごぜんたちばな、ごぜふいちご、を見るべく。路傍の樹下に、あわもりしようま、いはおとぎり、うこんうつぎ、えぞふすま、さまによもぎ、ちしまふうろ、なつゆきさう、まるばのひれあざみ、みやまひかげのかづら、みやまななかまど、みやま

かたばみ、れんぷくさふ、まるばしもつけ、あきのきりんさう等美花を付くるあり、偃松の燒跡には、

みやまななかまど、やなぎらん、あきのきりんさう、ごぜんたちばな、等の既に發生せるを見、ぜにごけ、ほそすぎごけ、の群落所々に點存す。更に未燒區域より燒跡に浸入するもの、こけもも、きばなのしやくなげ、うこんうつぎ、等あるを見るべし。道盡きて、

神笛溪に出づ、巨岩點在するの濕地あきのきりんさう、いぶきぜり、いはおとぎり、うこんうつぎ、ねいらんたい、おやまりんだう、おほやまふすま、がんこうらん、くるまゆり、こけもも、ごえふいちご、さまによもぎ、ちしまふうろ、はなごけ、つめごけ、まるばしもつけ、うめばちさう、みやまきんばい、みやますずめのひえ、みやまひかげのかづら、せんぼんやり等を得べく、偃松の樹下愛らしき、りんねさう、を見ることあるべし。

大噴火口(6200尺)、神笛溪より中靈臺に登れば大、中、小の火口並列して、指呼の間にあり。即ち大噴火口より漸次採集を試みんか、中靈臺の附近礫砂推積する處、

いはぶくろ、いはぎきやう、うらじろたで、ほそばおんたて、きくばくわがた、みやまきんばい、等の乾性高山植物景觀を現出すべく、中靈臺より右廻り、馬脊を登り南門臺に至る間の大噴火口壁上、あきのきりんさう、いはおとぎり、いはききやう、いはべんけいさう、いははたざほ、いちやくさう、うめばちさう、うこんうつき、えぞつがざくら、おやまりんだう、おほかさもち、がんこうらん、くろうすご、こめすすき、こすぎらん、こけもも、さまによもぎ、たかねぬかぼ、ちしまふうろ、はくさんちどり、みやますずめのひえ、みやまひかげのかづら、みやまたねつけばな、みやまくろすげ、りんねさう、きんすげ等を產し、就中たかねとんぼを珍とすべく、岩頭岩角を點綴するもの、いはう

め、いはひげ、いわうすげ(新稱)こめばつがざくら、だいもんじさう、みやまいちごつなぎ、くろうすご、れぶんくろすげ(宮部博士新稱)等あり。

これより南壁、巒峰群立するところの、岩角を綴るものには、いはぶくろ、いはうめ、いはひげ、いろつつじ、こけもも、みやまはんせうづる、だいもんじさう、くろうすご、等を見るべし。

更に中靈臺より左廻り、偃松の燒殘する間を登り、三角標に達するの間、

あきのきりんさう、いはうめ、いはひげ、いはおとぎり、えぞつがざくら、みやまおだまき、がんこうらん、きんすげ、くろすげ、こめすすき、さまによもぎ、ちしまふうろう、たかねすみれ、はくさんちどり、はりすげ、みやまくろすげ、みやまはんせうづる、みやまいちごつなぎ、りんねさう、いぶきぬかぼ等を見るべく。巨巖磊々たる間しこたんはこべ、たかねあざみ、(えぞふじあざみ)(新稱)等の珍品を得べく。岩陰やゝ濕性の黙、ちしませきせう、ちしまらつきやうを得べし。

大噴火口底、直下1000尺大噴火口底に下らんか、巨巖の下あらしぐさ、いははたざほ、うめばちさう、みやまおだまき、たかねすみれ、ちしませきしやう、しこたんはこべ、ひめみやますみれ、みやまたねつけばな、ちしませきしやう、みやまくろすげ、おのへりんだう、うつぼぐさ等を見るべく。南壁岩下陰濕の地多く地衣類を產し、ちしまきんれいくわを產すること多し。

小噴火口、小噴火口は大、中、噴火口の中間に座す。面積甚だ小なれども、珍品に富む。口底一小池あり、えぞほろねを產す。たかねおみなへし、(ちしまきんれいくわ)を珍とすべく、

あきのきりんさう、いはおとぎり、いはぶくろ、いははたざほ、おのへりんだう、みやまおだまき、くじやくごけ、こめすすき、さまによもぎ、

ほそすきごけ、ほろばおんたて、ちしまふうろ、ほうらいさう、みやますずめのひえ、めあかんきんばい、みやまきんばい、ねぞほろね等密生す。

中噴火口、小噴火口の北に接して存す、口底不斷の水あり、水底多くの蘚類及ねぞほそねを產す、水邊巨岩磊々たる岩角いはうめの簇生するを以て特異とす、其他岩角を飾るもの、

えぞのつがざくら、こけもも、こめばつがざくら、みやまきんばい等あり。口壁にいはぶくろ、おのへりんだう、きばなしやくなげ、ごぜんたちばな、さまによもぎ、ちしまふうろ、ひめいちげ、ほそばおんたて、まるばのしもつけ、等を產し特に蘚類を產すること他に冠たり。

藥草が原、藥草が原は明治四十一年八月蝦夷富士高山植物講習會開設に際し、余等會員の探檢發見するところなり。所謂南門臺下より偃松林を直下すること400尺乃至500尺溪谷分かれて三條をなす、みづばわうれんを產す、藥草原の名これより起る。

第一溪、あらしぐさ、いぶきぜり、うめばちさう、おほかさもち、きばなしやくなげ、くろうすご、こいちねふらん、しろばなにがな、うつぼぐさ、ちしまふうろ、ちしまきんぽうげ、みやまきんばい、みやまやなぎ等の珍品を見るべく。第二溪に入れば八月中旬尙殘雪を見る、流れに沿ふて下らんか、いはいてう、みつばわうれん、最も多く、

あらしぐさ、うめばちさう、きばなしやしなげ、きんすげ、みやまやなぎ、みやまくろすげ、しろばなにがな、はくさんちどり、こいちねふらん、ちしまきんぽうげ等點々岩際を飾り、第三溪に達すれば、あきのきりんさう、うこんうつぎ、きばなしやくなげ、くろうすご、ちしまふうろ、しらねあふひ、はくさんちどり、を產す。

靈岩公園、三角測量標より第二番溪を下ること、約9町の地點にあり、出口理學士の發見にかゝる。本區域は山中最も大なる御花畑な

れども、同氏以來未だこれを探檢せるものあるを聞かず。

ちんぐるま、を產すること、出口學士の採集によりて知らる。

星が池、御花畑入口より下ること約9町にして星が池に達す。池中ほしみどろを產するも寄とすべし、池邊の植物景觀も亦自ら獨特のものあり、いはいてふ、たかねすみれを珍とすべく、

あらしぐさ、いはべんけいさう、いぶきぜり、いぶきぬかぼ、うすばさいしん、うめばちさう、うこんうつき、えそほそね、ねいらんたい、うらじろたて、おのへりんだう、かうぞりな、みやまおだまき、しらたまのき、あかもの、きんすげ、きばなのしやくなげ、くろうすご、ごえふつつじ、さまによもぎ、ちしまふうろ、みやまくろすげ、しらねあふひ、はなごけ、はくさんちどり、ひめくわんぞう、みやますずめのひえ、みやまやなぎ、みやまひかげのかづら等其周壁に叢生するを見るべく、岩角の間いはぶくろ、こめばつがざくら、だいもんじさうの綴るを見るべし。

本山植物目錄は紙面の都合あれば次號に讓る。